

2021年 大谷大学文藝コンテスト
審査員からのメッセージ（エッセイ・小説部門）

一般社団法人言の葉協会 専務理事 宮脇一徳

コロナ禍の終息が待たれる令和4年度「大谷大学文藝コンテスト」。応募状況は、エッセイ部門が594点（前年605点）、小説部門が115点（前年605点）新型コロナウイルス感染の問題が影響したのか、前年度より応募は少なくなった。

しかし、応募作品は力強さに溢れ、一直線の内容になっていた。作品のテーマは多岐に及ぶ。介護、食べること、インフルエンザ、人生、希望、私の一日、弟、エッセンシャルワーカー、神、縁の下の力持ちなど様々だった。高校生とは思えない、深く、鋭く、研ぎ澄ました、巧みな構成力、文章力に会い嬉しくなる。今回はどうだったのか、期待通りの作品を、何度も読み、作者の狙いや意図を紐解き、その想いにたどり着こうと努力しなければ分からない作品もあり、理解できたときはまさしく「うまい」「さすが」と頷く。作品の構成、ストーリー、文章の展開がうまくなっている。一気に読みこんでしまうほのぼのとした作品もあり、「おもしろい」「楽しい」「いいね」まだまだ成長の余地がいっぱい残る作品もあった。たくさんの本を読んで欲しい。いろんな経験を積み、人生を楽しんで欲しい。そんな期待と可能性を秘めた作家の出現を期待しています。ひとりよがりや、自分の文章力に溺れ、理解できないものもあるが、まだ若い。経験や努力を重ね、もっともっと勉強し、努力して苦しみながら言葉を紡ぎ、その中から新たな才能が目覚めます。楽しみな作品がある。審査は先生方の「ああだ」、「こうだ」の激論や想いが交策し、しっかりした議論の中から選ばれた作品が並ぶ。自信をもって選んだ作品は珠玉の香りが高い。これから応募する皆さんの更なる力作に期待したい。どんな作品が寄せられるのか、楽しみにしています。